

ここは駅から徒歩十分、スーパーへは五分、日当たりはなかなか良好のアパート「かいわれ荘」。一〇一号室から二〇五号室までの二階建て、現在一〇三号室と二〇五号室が空いており入居者絶賛募集中である。

住人はみな個性豊か、すぐに仲良くなれること間違いなし。そのあなた、こんな物件はいかがですか？

「管理人のお姉ちゃん、おはよう！」

桜も散り、木々も緑が生い茂り始めている今日、ここ「かいわれ荘」の管理人である斉藤がアパートの玄関を掃除していると後ろから元気な声が聞こえた。

「はい、おはよう葉一くん。今日も元気だね」

にこつと最近抜けたばかりの前歯を見せながら笑うこの男は一〇二号室に住む男の子の葉一くんだ。

「お姉ちゃん聞いて、今日はね、みんなでピクニックなんだよ」

前歯が抜けているせいか少し空気の抜ける音がしている。その中で一生懸命に話す姿はとても可愛らしい。

斉藤が元気いっぱい話すその姿にほっこりしていると、後ろから葉一を呼ぶ二つの声が聞こえた。

「葉一お弁当忘れてる！」

「葉くん出るの早いよ、パパ達置いてかないで」

あ、管理人さんおはようございます。と挨拶しながら葉一を撫でくり回しているのは葉一の父である。それを横目に見ながら斉藤に挨拶をし、葉一にお弁当を手渡すのは葉一の姉である双葉だ。



「じゃあ管理人さん行ってきます」

「いつてらっしゃい。ピクニック楽しんできてね」

お弁当をリュックサックにしまった葉一を確認した父親が撫でくり回すのを辞め、斉藤に挨拶をした。そして父親に続くように二人も行ってきます！　と言い出て行った。

この家族は二年前に奥さんを亡くしているため父子家庭ではあるが、父親が仕事るときはこのアパートの誰かが面倒をみている。父親も重度の親ばかりであるため今日のような休みのときの家族サービスは完璧。

これが一〇二号室の大谷家族の日常である。

大谷家族を送り出し、掃除を終えた斉藤は前に田舎の両親から送られてきた野菜を住人におすそ分けをしようとまず一〇四号室へ向かった。

野菜を袋に詰め部屋へ向かうと玄関に立ち、ものすごい速さでピンポンを連打する男性がいた。

「小野先生！　いるのはわかってるんですよ、早く出てきてください！　おい、出てこいっつってんだろ！」

「おはようございます、土屋さん。またですか……、大変ですね」

このピンポンを高速で押しながら怒鳴る男性は不審者などではなくこの部屋に住む小説家、小野の編集である。

「はい、毎度お騒がせしてすみません。締め切りまでもう一週間を過ぎているのに先生からの連絡が一切なくて」

申し訳なさそうにしながら言う土屋に斉藤は大変だなあと、苦笑いを浮かべる。そのまま二人で話していると隣の一〇五号室から声が聞こえてきた。

「ちよ……。だ……。」

扉の前でこそ何かをしているのか、かすかに声が聞こえる。二人で不思議に思い扉を見ていると急にバタンツと扉が開き、少年と男性が出てきた。

「ちよつといい加減にしてくださいよ！　あと離れてください！」

「秋くん、開けないで！　絞められちゃう、俺、絞められちゃう！」

部屋から出てきたのは一〇四号室の住人であり、土屋の探し人である小野。その小野に抱きつかれている形で止められているのはこの一〇五号室の住人である北原秋である。

「あなた、また秋くんの所に逃げてたんですか！　高校生に匿ってもらうなんてなに考えてるんです。仕事をしろ！」

秋にまだひつついている状態の小野をひっぺがして外にも関わらず正座させ、説教を始める。

「おい私が怒ってる理由わかってるでしょう、締め切り前なのになんで秋くんの部屋に逃げてるんですか」

「ちよ、ちよい待て。少し落ち着け、な。俺の話を聞いてくれ。秋くんの部屋にいたのは訳があるんだ」

「ほぼ爆発寸前の土屋を前に冷や汗をかきながら手をわたわた動かし必死に弁解しようとする小野。」

「昨日はな、双葉ちゃんと葉一くんと遊んでいるときに手品を見せたんだ。そしたらすごく喜んでくれてね、また見たいって言うてくれたから秋くんと練習してたんだよ」

「ほら、ここから花が出ます、と手からぽんつと花を出す。ころんと地面に落ちる花がむなしい。」

「今あなたがすることは締め切り守ることだろうっ！ なに人の部屋に上り込んでまでやってるんですかこのバカッ！」

「バカとはなんだ、俺がこれをマスターするのにどれだけ小説を書かずにがんばったと思ってるんだ！」

「だからそのことを今言ってるんじゃないですか。何聞いてたんだあんた！」

「ワー、ギャーと外で大乱闘を繰り広げている二人をさすがに止めようと思ひ齊藤は声をかけようとした。しかし、それより先に秋が動いた。」

「あ、あの。小野さんばっかあんま責めないであげてください。その、俺も一緒にやってたんで、だから……」

少しビクつきながら話す。その声には二人は動きを止めた。そして今まで般若のような表情をしていた土屋はにっこりとした笑顔を浮かべた。

「秋くんは全然気にしなくていいんですよ。どうせこの人に無理やりつき合わされたんでしょう。でも少し騒ぎすぎましたね、齊藤さんも迷惑をかけてしまってますみません。ほら、先生あんたも謝ってください」

土屋は振り返りまだ座ったままの小野を見下ろす。黙ったまま動かない小野を見てもう一度呼びなおす。するとぶわあつと目に涙を溜めた小野が秋に飛びついた。

「いくら男子高校生とはいえ重たさに耐えられなかった秋は、「ぐええ」という声と共に地面とご対面をした。」

「三十五にもなつて何みつともないことしてるんですか、いいから離してあげてください！ 秋くん死にかけてます！」

再び怒る土屋。第二라운드의開始である。

もう多分何を言っても聞いてもらえないだろう、むしろもう放っておこうと思った齊藤はこの二人の野菜は後から渡すことにして上の階へ上がって行った。

カン、カンと音を立てながら二階へとあがる。次の目的地は二〇一号室だ。斉藤は目的の扉の前に立つとチャイムを押した。

「北見さん、斉藤です。野菜のおすそ分けに来ました」

しばらくすると、はいという声と共に扉が開いた。

「お野菜ですか？ わあ、嬉しい。そろそろ食べ物で底をつきそうだったんです」

にこにこしながら笑顔で野菜を受け取るのはこの部屋の住人北見だ。

「底つきそうって……、また買い物に行くのさぼってるんですか？」

「だって面倒くさいんですもん。もう太陽の光をあびるだけで溶けそうで」

今も目がすでに痛いと言う彼女は俗に言う引きこもりである。

毎月きちんと家賃は払っているのだが、その収入源がどこなのかは斉藤も気になるところである。

「あ、そうそう。お隣の溝口さんは今おでかけしてますよ」

「あら、そうなんですか？」

「ええ、なんでも最近またかわいい猫を見つけたとか。ほら、最近よくこの辺をあるいている大きい白猫ちゃんがいるじゃないですか」

「よく黒と茶色の猫といる？」

「そうそう。その猫ちゃんがかわいくて写真を撮りに行ってるみたいなんです」

溝口とは二〇二号室の住人である。彼女の印象を他人に聞くと皆からは「キャットホリック」と返ってくるくらいに一に猫、二にも猫、三、四も猫で五にも猫。という人物だ。

「じゃあこの野菜、溝口さんが帰って来たら渡してもらえますか？」

まかせてください、と親指をグッと前に出しました今度お礼しますねっ、と笑った北見は部屋へと戻って行った。

それを斉藤は見届けてから次の二〇三号室へと向かった。

斉藤が二〇三号室の前に着くと同時に扉が開き、中から女性が出てきた。そしてその女性は斉藤が見えていないのかそのまま二〇四号室の扉をチャイムも押さずに、勢いよく開け玄関から叫んだ。

「ちよつとあんた！ ふんふんっふんふんっうるっさいのよ、筋トレすんならもつと静かにやりなさいよ、この筋肉はか！」

「別にちよつとぐらいいいじゃねーか！ それにお前の声の方がうるせえんだよ。この数学オタク！」

俺は筋肉バカじゃねえ、と二〇四号室から出てきたのはこの部屋の住人である明広、そ

して誰が数学オタクよつ、と叫んでいるのは二〇三号室の住人である雫だ。

この二人は幼馴染で幼稚園から現在の大学までずっと同じ学校、そして同じアパートであり、さらには隣同士というミラクルだ。別に二人で相談したとかではなく、行った場所にあいつがいた、だそうだ。

「そんなんだから雫はモチねえんだよ、ぐちぐちお前は俺のおかんかっ」

「はあ？ こんなダメ息子なんていらぬわよ！ それに残念でした。この前、先輩から告白されたもの！」

「え……」

あ、自爆したなと斉藤は思い合いが落ち着いたので声をかけることにした。

「雫ちゃん、明広くん、こんにちは。今日も相変わらず仲良しね」

「仲良くありませんっ」

綺麗にハモる二人。そしてやっと斉藤がいることがわかった二人はフンツと顔をお互いに背けてから斉藤に話かけた。

「野菜ですか？」

「ええ、実家からいっぱい送ってもらったから」

ありがとうございます、また同時に言う二人。

一緒に言うな、というような目をしながらお互いの顔を見る。少し間を置いてから明広は、雫が持っている野菜が入っている袋を持った。

「ほら、お前料理できないから斉藤さんからの野菜、無駄にすんだろ。俺が有効活用してやるから晩飯食べに来いよ」

「できないんじゃないよとちよつと苦手なだけよ！ でもまあ、せつかくだし食べに行つてあげてもいいわよ」

お前ほんと可愛げないな、とまた言い合いを始めながらも一緒に部屋に入つて行く二人を見送りながら、斉藤はなんだかんだで本当に仲がいいなと思いつつながら微笑んだ。

カン、カン、と階段を斉藤は降りる。野菜を配るだけだったがいつの間にか時間はたち、もう夕方になっていた。自室に戻る前に小野と秋の部屋に届け損ねた野菜を持って行くこととしたが、部屋から怒声と悲鳴が聞こえたため何も聞かなかったことにして、自室へ戻ることにした。さらにその声は秋の部屋から聞こえたため、まだ巻き込まれていたのか……、と思いつつ秋の分も後から渡すことにした。

「お姉ちゃん！ ただいま！」

部屋へ戻ろうとすると、今日の朝にも聞いた元気な声が聞こえて来た。

「おかえり、葉一くん。みんなでピクニック楽しかった？」

「うん！ あのね……」

今日あったことを順番に一つずつ話している葉一に微笑みながら斉藤が話を聞いていると、おーい、と言う声が聞こえて来た。

「葉くんはやいよー。 パパとお姉ちゃん置いていかないで」

あ、管理人さんただいま。と朝と同じようなやりとりをする家族を見て斉藤は思わず笑う。

そんな斉藤を不思議に思った三人は首を同時にかしげる。そして四人は顔を見合わせ、また同時に笑い出した。そんなかいわれ荘の日常。

あなたもいかがですか？